

# 貝毒調査（漁場環境監視等強化対策事業）

朝田健斗・加藤慎治・吉田和貴

特定有毒プランクトンに起因する二枚貝類の毒化実態を把握し、貝類の食品としての安全性を確保するとともに、漁業や県民等への被害の未然防止を図った。

## 方 法

本県の沿岸8海域（播磨灘，ウチノ海，鳴門市中央部，松茂，徳島市，小松島市，阿南市，海部郡）及び小型底びき網漁場2海域（播磨灘，紀伊水道）の計10海域(図1)を調査対象海域として設定し、貝毒原因プランクトンの出現状況のモニタリングとカキ等二枚貝の貝毒検査を実施した。

プランクトンモニタリングについては、麻痺性貝毒原因種として*Alexandrium tamarense*，*Alexandrium catenella* 及び*Alexandrium tamiyavanichii*，下痢性貝毒原因種として*Dinophysis acuminata* 及び*Dinophysis fortii* の出現を調べた。

貝毒検査については、財団法人食品環境検査協会に依頼

し、その可食部における麻痺性貝毒の毒量を検査した。

なお、ウチノ海及び阿南市におけるプランクトン調査の詳細については、本事業報告書の「ウチノ海養殖漁場環境調査」，「橋・椿泊湾赤潮貝毒調査」を参照されたい。

## 結 果

平成31年3月に、播磨灘とウチノ海を除く海域で、*A. tamarense*による麻痺性貝毒が出荷自主規制を指導するレベル（4MU/g）（以下「基準値」という）以上で検出され、最長で5月まで出荷自主規制が継続された（図2）。また、令和2年2月に、阿南市（椿泊）で*A. catenella*による麻痺性貝毒が基準値以上で検出され、出荷自主規制が3月まで継続された（図3）。このとき、貝毒発生期間の途中で*A. tamarense* が出現し混在することがあった。なお、出荷自主規制解除以降も、貝毒が検出され続けている。

さらに、播磨灘、紀伊水道の小型底びき網漁場で漁獲されたアカガイからも基準値以上の麻痺性貝毒が検出され、平成31年3月から令和元年11月まで出荷自主規制がかけられた（図4）。

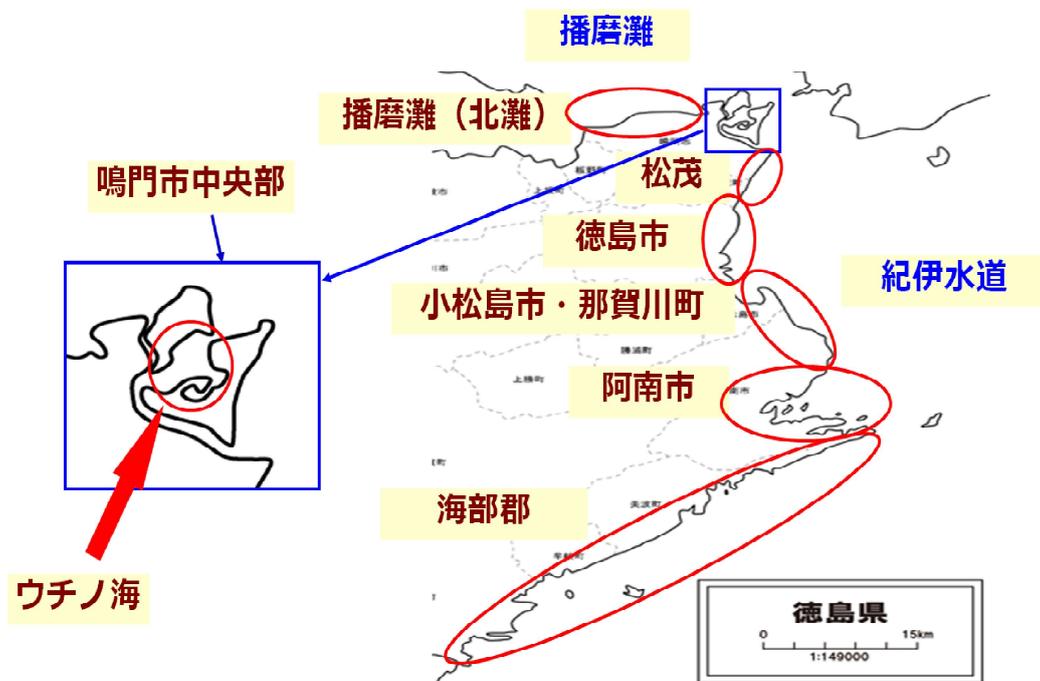


図1．調査海域区分

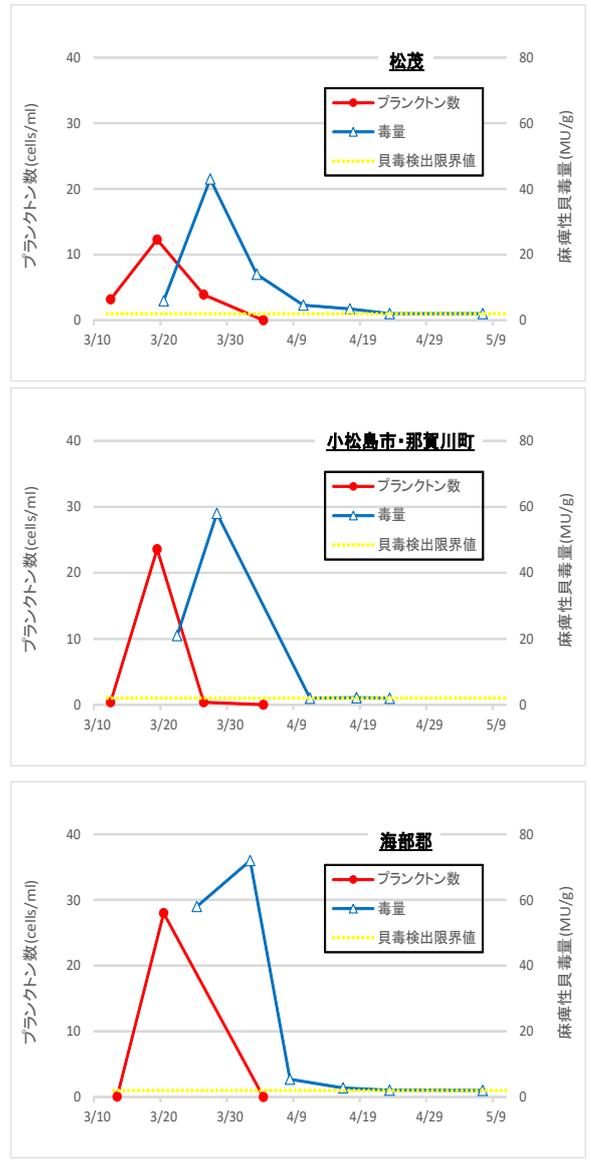
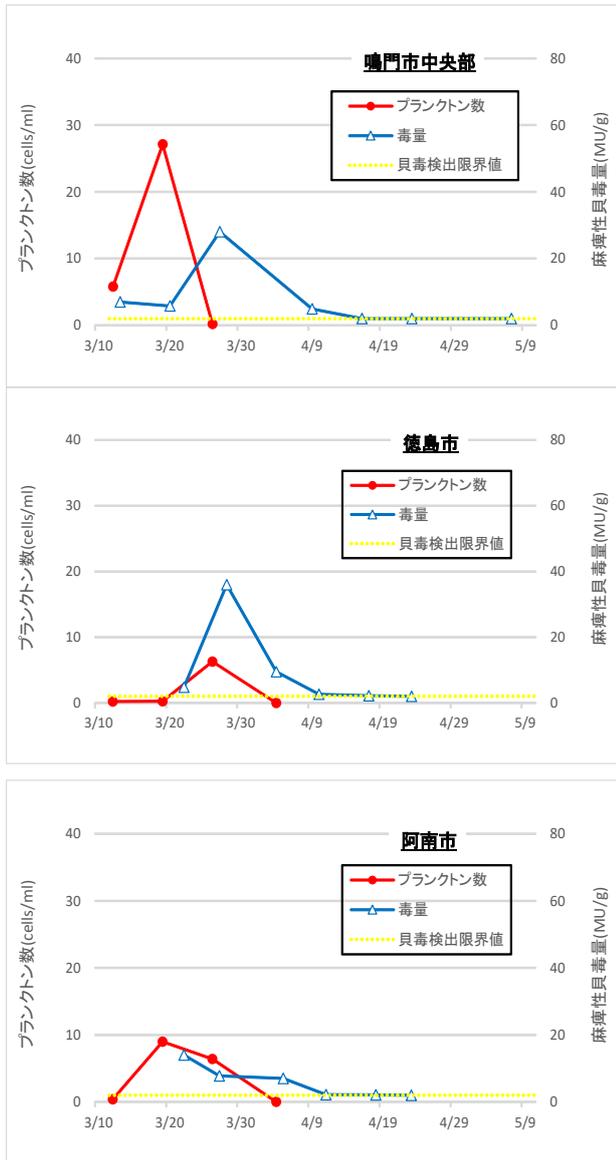


図2. 平成31年3月～5月の各海域の*A. tamarensis*の出現数とカキから検出された麻痺性貝毒量の推移

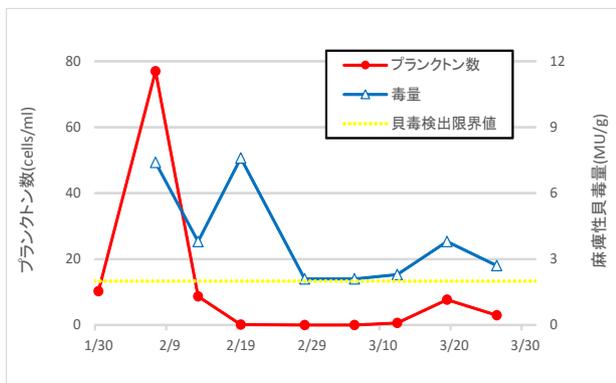


図3. 令和元年1月～3月の阿南市（樫泊）における *A. catenella* 及び *A. tamarensis* の出現数とカキから検出された麻痺性貝毒量の推移

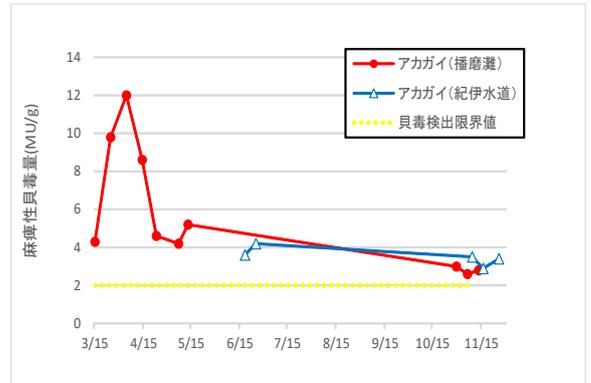


図4. 平成31年3月～令和元年11月のアカガイから検出された麻痺性貝毒量の推移